



海外の浄土真宗事情

第3回 北米開教の沿革と歩み 其の二

今回は先月に引き続き、主に戦後から現在に至る歩みの概要を述べる。

戦後の教団にとつての最重要課題は人材育成であった。もちろんそれは戦前より推し進められていたことである。日系二世二世が将来を予見した時、日英両言語の堪能な開教使育成を急務とせざるをえなかった。開教財団設立の目的の一つもそれであった。そして、優秀な二世青年を日本に送り、教育を受けさせるために京都に寄宿寮が設けられたのは一九三〇年代のことであった。

その弛まざる努力は第二次世界大戦後も続けられたのは言うまでもない。また、前号で述べたように、パークレールに仏教研究所を設立し、多くの著名な仏教学者を日本より招聘して、一般人を対象とした講座を開いた。その研究所が正式に学校法人「仏教大学院」という名称のもとでアメリカでの開教

使養成所として機能し始めたのが一九六六（昭和四十一）年のことである。

また、教団としての米国仏教団は、日系社会を背景として、一九六〇年代には戦前の活気を取りもどし、順調に教線を伸ばしていった。その頃、サンフランシスコに新しい教団本部も建設され、仏教書店、教育部や視聴覚部などが設けられ日曜学校の生徒も増加していった。

一九七〇年前後のアメリカは、既成の価値に挑戦する若者のムーブメントに代表されるように、大きな変化が起こりつつあった。また、ベトナム戦争の終結とともに、多くのアジア系の移民が流入し、アジアの宗教、特に民族仏教がもたらされた。この時代に宗教の多様化がより顕著になったといえる。特に、禅、チベット仏教、上座部仏教などがアメリカ社会に受け入れられるようになっていった。同時に、一般大衆の仏教に対する偏見も少しず

つ減少していったのである。

その一方、米国仏教団は、浄土真宗本願寺派を母体としたアメリカの宗教団体ではあるが、青少年特に日曜学校の宗教教育においては一般仏教が主となるような教化方法をとってきていた。また、仏教会の活動として、日曜の法座の他、スカウト、日本語学校、各種スポーツ、青年会、婦人会などのプログラムも盛んにおこなわれ、宗教的な雰囲気（ふんいき）の中での日系コミュニティセンターとしての役割を担（にな）ってきたのも事実である。

そういう中で、真宗教団としての歩みを振り返ると、一体どこまで若い世代に浸透しているのかということとが常に問われている。日系人が差別を超えて一般社会に受け入れられるようになると同時に、仏教会の役割も変わりはじめた。

現在では、教団を支えてきた一世は

すでに去り、二世も高齢化を迎えている。西海岸にある多くの仏教会は未だに日系主体の団体であるが、過疎化の問題を抱（かか）えるところが多くある。また都市部では人種を超えた会員が少しずつ増えてきているのも新しい傾向である。内陸部や中西部、東部となると特にそれが顕著である。

仏教が多様化しているアメリカで、少数ではあるが、各種の仏教を遍歴して真宗のよさに目覚めて、仏教会に入出入りする人が見られるようになったことは以前には見られなかった現象である。多くの仏教会は以前にもまして、公開講座を開催し、開かれた寺院を目指して活動を始めている。それと同時に、仏教会の活動を助ける開教使アシスタ



ワシントン近郊の恵光寺の日曜礼拝で



今年10周年を迎える浄土真宗センター

ント制度が取り入れられ、現在ではその数百五十名を超えていることは特記されるべきである。

十年前には、バークレーに新しく「浄土真宗センター」が設立された。龍谷大学や宗派のオフィスが設けられ、英語通信教育も始められた。また、

一九八九（平成元）年の地震で建物をなくした仏教大学院もこのセンターをキャンパスとし、学生数も増加している。仏教教育部もここを利用し、開教使や信徒のセミナー、若人の講習会などを開催して、真宗を主体とした新たな教団作りが始められ、その成果が徐々に見られようになっている。

最後になったが、苦境の中、教団を支えてきた多くの先人の苦勞を忘れてはならない。彼らの深い願いのもと、本派の海外教団として最大規模を誇る米国仏教団は、世界各地に広がる念仏の教えを、より一層広宣するため、英語での発信の中心拠点となるべ



若い念仏者の集い——浄土真宗センターにて

く、宗派と協力し、その実現に向けて努力を続けている。

（北米開教区開教総長 梅津広道）